

〈50周年記念講演会〉

トマス・モアとイギリスの人文主義女子教育

石井美樹子

トマス・モアとイギリスの人文主義女子教育

『ユートピア』（1516年）の作者としてヨーロッパ中に名を馳せたトマス・モア（1478～1535）はオックスフォードで学んだ法律家だったが、深い学識と高潔な人柄からヘンリー八世（1509～47）の信任を得て、大法官（日本の総理大臣に相当）となった。だが、ヘンリー八世が妃キャサリン・オブ・アラゴン（1485～1536）との離婚問題のために、ローマ教皇庁と袂を分かとうとすると、これに激しく抵抗し、ついには処刑された。偉大なる人文学者の処刑は「法の名のもとに行われたイギリスで最も暗い犯罪」と言われている。

トマス・モアはヘンリー八世に敗北した。しかし、その精神的遺産にははかりしれないものがある。そのひとつが、モアが始めた人文主義にもとづく女子教育である。

トマス・モア家の学校

トマス・モアには、長女マーガレットをかしらに4人の子どもがいた。他に、モアの姉の娘フランセス・スタヴァートン、後妻アリスの連れ子アリス、養女マーガレット・ギグス、被後見人のアン・クレサクル、同じく被後見人のジャイルズ・ヘロンがモア家で養育されていた。

モアは子どもたちのために、ロンドン郊外のチエルシーの屋敷に小さな学校を開いた。ロンドンの聖パウロ学校の卒業生ジョン・クレメント、当代随一のオランダの人文学者エラスムス（1465～1536）の写字生のケンブリッジ大学のウィリアム・ゴネル、宮廷の家庭教師のドイツ人のニコラス・クラッツァーなど一流の優れた学者を学校に

招き、時間があるときは、モア自身が教壇に立った。

モアの教育方針は、男の子と女の子を同じ教室で学ばせ、ギリシャ・ローマの古典に基礎をおく人文主義教育を施すことであった。学問を身につけた女性は自分の子どもの良き教育者・母となり、夫の話相手をつとめることのできる良き妻となると信じていた。古代キリスト教の教父の聖アウグスティヌスも、14世紀の聖ヒエロニムスも女性たちに学ぶことを奨励している。

オランダの画家ハンス・ホルバイン（1497頃～1543）作「トマス・モア家の肖像画のための習作」（バーゼル、市立美術館）では、モア家の女性たちはみな本を手をしている。（図）

トマス・モアがヘンリー八世の大法官となり、子どもたちと過ごす時間が少なくなると、宮廷や旅先からしばしば手紙を送り、「怠けてはいけないよ」と励ました。長女マーガレット宛ての手紙に次のようなものがある。

「おまえが毎日どんなものを読んでいるのか、どんなに楽しい会話を交わしているのか、文学を読んでどんな箇所に喜びをおぼえたか。……子どもたちには怠け者になってほしくない。もしそのような危惧があれば、わたしはいつでも仕事を辞め、経済的に困るようなことになっても、子どもたちと家族のそばにいて世話ができるようにするつもりだ。マーガレットよ、おまえほどわたしにとってかけがえのない大事な者はいないのだ」\*1

学校の生徒たちに宛てた手紙のなかには、次のようなくだりがある。

「科学の勉強がとてもし進んだとか。それなら、いまでは、空に輝く北極星や熊座ばかりでなく、普通の星だって、空をみあげてわたしに教えてくれることができるようになったのだね。そんなになるためには、たいそうな学問とわざが要求され



るのだ。天文学では、月と太陽を区別することは大変な仕事なのだよ」\*2

子どもたちが生き生きと古典の学問にいそしむモア家の学校はプラトンのアカデミーにたとえられた。

マーガレットは父の願いどおり、優れた人文学者になった。3世紀のカルタゴの司教キプリアヌスのラテン語のテキストを元の言葉の意味がいっそう明確になるよう校訂し、テキストを出版した。父と共著で、死についての黙想録を著している。ラテン語から英語に訳した『使徒信教に関する論考』を出版している。エラスムスの主の祈りに関するラテン語の解説を翻訳出版している。ラテン語の意味を正確に理解し、リズムカルな英語に翻訳した業績は高く評価された。

マーガレットが法律家のウィリアム・ローパーと結婚して身ごもり、母になろうとしているとき、モアは旅先から娘宛にこんな内容の手紙を書いている。

「生まれた子が女の子だとしても、母親をお手本にして熱心に勉強し、母親の徳と学問を身につ

ければ、女であることの障害を克服できると信じている。3人の息子を授かるより、そのような女の子を1人授かるほうが、わたしはずっとうれしい」\*3

## 人文主義の教育を受けるチューダー王家の王女たち

ヘンリー七世（1457～1509）に端を発するチューダー王朝は、14世紀のイタリアのフィレンツェで始まった文芸復興、ルネサンスを遅ればせながら奨励した。王室には、アーサー王子とヘンリー王子（後のヘンリー八世）、マーガレット王女とメアリー王女がいたが、子どもたちをルネサンスの人文主義教育で育てた。アーサーは早世するが、次男ヘンリー王子は父のあとを継ぎ、ルネサンス教育を受けた初めてのイギリス王として、熱狂的に迎えられた。ヘンリー八世の子どもたち、エドワード王子（後のエドワード六世、1537～53）、とメアリー王女（後のメアリー一世、1516～58）とエリザベス王女（後のエリザベス一世、

1533～1603) はギリシャ・ラテン語を基礎とするモア家のカリキュラムを取り入れ、語学のみならず科学、文法、論理学、聖書釈義などを盛り込んだ教育を受けた。

エドワード王子はさておき、2人の王女はいかなるカリキュラムで教育されたのか。メアリー王女の教育方針は、スペイン生まれの王妃キャサリン・オブ・アラゴンの庇護を受けたスペイン人の人文学者ヨハネス・ルドヴィゴス・ビベス (1492～1540) の著した『キリスト教徒の女性のための教育』にもとづく。初期キリスト教の教父たちの著作、キリスト教徒の詩人たちの作品、古典の作品、新・旧訳聖書の一部がテキストとして含まれている。ビベスも女子にも男子と同じ教育を受けべきだと考えていたが、女性は本来的に弱く、簡単に誘惑されると信じており、その意味でビベスの女性観は中世以来の保守的なものであった。それで、メアリー王女には、自分が本来的に弱いということを認識させ、いかに学問を積んでも寡黙でいるように説いた。

ビベスとは対照的に、エリザベス王女の家庭教師ロジャー・アスカム (1515～68) は、女性だからといって控えめになったり消極的な必要はない、学びに男女差はないと信じていた。王女には教師に積極的に話かけ、論を展開し、説得する術を学ぼう奨励した。アスカムは友人のシュトラスブル大学学長ヨハン・ストルウミウスに宛てた手紙のなかで、エリザベス王女のカリキュラムについて記している。

「王女さまとともにキケロ (紀元前1世紀のローマの政治家) の全作品と、歴史家リウィウス (紀元前1世紀) の作品のほとんどを読破しました。午前中はギリシャ語の新約聖書を読み、午後は、イソクラテス (アテネの著述家、紀元4世紀) の作品から適当なものを選び、また古代ギリシャの劇作家ソフォクレス (紀元5世紀) を読みます。正しい言葉遣いで話し、古代の賢人の教訓を知っておくことは、ご身分がら、いつかご自分を弁ずるさいに必要だと考えるからです」\*4

運命の転変を経て、25歳でイギリスの王座に即位したエリザベスが、ヨーロッパの男性君主に一歩のひけも取らず対抗し、1588年には、最強と

言われたスペインの無敵艦隊を蹴散らし、イギリスをヨーロッパの強国に育てあげて後の大英帝国の基礎を築いた栄光の背景には、王女時代に受けた人文主義教育の恩恵がある。ギリシャ、ラテン語を自由に操り、フランス語、イタリア語、ドイツ語を駆使し、通訳なしで外国の大使と渡り合い、外国の君主と手紙のやり取りをする女王の教養が統治にどれほど役だったか。女王の統治の成功の秘密は人文主義による良き教育を受けたことにある。

トマス・モアが掲げた学問の灯火は、モアの処刑によって消え去りはしなかった。エリザベス女王の時代に大輪の花を咲かせるのである。女王が教養ある女性であったばかりでなく、教養ある女性たちに囲まれていた。王室に倣って高位貴族たちが女性教育に熱をあげたために、ルネサンス期のイギリスには、教養ある女性が輩出するのである。女王の女官も侍女もギリシャ・ラテン語に通じた教養ある女性たちであった。

以降、イギリスの女子教育は発展し続け、今もなお世界最高の水準にあるとあってよい。

#### 注

- \*1 Richard Marius, *Thomas More* (London: Collins, 1986), p. 222.
- \*2 Ibid., p. 222.
- \*3 E. E Reynolds, *Margaret Roper* (London: Burns & Oates, 1960), p. 37.
- \*4 Frank A. Munby, *The Girlhood of Queen Elizabeth I* (London: Thames and Hudson, 1987), pp. 70-71.